

新出版ネットワーク検討委員会 報告書

2024年4月

はじめに

新出版ネットワーク検討委員会委員長 伊藤健治（文藝春秋）

新出版ネットワーク（出版VAN）は、出版社の営業部門にとってとても身近で必須というべきツールである一方、その活用法や取次会社を送っているデータが実のところ、どのように使われているか、あまり意識されていないのが現状でした。その新出版ネットワークが、NTTのISDN回線停止を受け、インターネット回線に移行することとなり、このタイミングで、一度、新出版NWの今後を考えましようということで、JPO内に新出版NW検討委員会が設置されました。長年にわたって業界の重要なインフラとなっているにもかかわらず、新出版ネットワークには明確な運営組織がありません。検討委員会では、まずユーザー会を設立しようとお話し合いました、一昨年春、皆様にユーザー会設立のお知らせと参加のご案内を差し上げたという経緯です。

ご存じない方もいらっしゃると思いますので、改めて簡単に新出版NWの歩みを振り返ります。

新出版NWの前身である出版VANがスタートしたのは1991年にさかのぼります。当時、取次会社さん、書店さんからの注文は、電話やFAX、短冊、スリップなどで大変煩雑なやり取りがされていたわけですが、コンピュータを使ってデータ通信でのやり取りに変えましようということで始まったのが出版VANです。94年には取協・書協VAN推進会議が設立されて、業界標準フォーマットがつくられます。現在使われているフォーマットは98年に改定された第2版で、これ以降はこのフォーマットで継続運用されています。つまり送受信の対象となるデータ項目がここで定められたということです。この頃になると利用社もだいぶ増えてきています。

出版VANはNTTと一緒に始めたサービスでしたが、90年代後半以降、PCおよび通信技術の進化、通信環境の変化が一気に進んだことを受けまして、2003年に富士通のネットワークを使った新サービス「新出版ネットワーク」がスタートしました。出版VANもこちらに移行して、現在に至っています。

新出版ネットワークに移行する際には、取次代表委員および出版社代表委員として取次8社、出版社6社が幹事役となったわけですが、その後も運営組織として常設されたわけではありませんでした。富士通さんは通信インフラのサービス提供会社ではありますが、サービス全体の主体的な管理・運営や企画などを担う組織ではありません。繰り返しになりますが、この状況を受けてユーザー会を設立したというのが一昨年からの流れとなります。

ユーザー会の最初の取り組みとしまして、一昨年夏、まず利用実態についてのアンケートを実施しました。その回答結果をまとめましたところ、利用状況が利用社ごとにかなり違うことがわかりました。加えて、新出版NWを利用しているけれども、担当者が代わってあまり理解していない、教えてほしいといったご要望もありましたので、そうした声に応えるべく、勉強会を開催するなどいたしました。

この報告書は、そうした新出版ネットワーク検討委員会の活動の記録です。今後、業界全体で新出版ネットワークの利活用をますます活性化するとともに、将来、新たな業界横断システム構築の動きがあったとき、その議論を進める一助となれば幸いです。最後に、この委員会に集った出版社、販売会社の皆さま、アンケート等に協力いただいた皆さま、富士通Japanの皆さまに心より御礼申し上げます。

2024年4月吉日

目次

- ・ 新出版ネットワークの成り立ちと経緯
- ・ 新出版ネットワークのデータ内容
- ・ 新出版ネットワーク検討委員会の歩み
- ・ 取次会社の利活用について「在庫情報と受発注・出荷情報」
- ・ ユーザー会アンケート

新出版ネットワークの成り立ちと経緯 (書協 50年史より抜粋)

- 1991年 1月 出版VAN出版社連合会が有志出版社によって設立される
- 4月 1 出版社と4取次の間で、データ振分機能 (TWIN'ET) が始動
- 5月 出版業界VAN連絡会が出版社17社によって設立される

- 1992年 12月 「出版VAN接続の手引き」「出版VAN導入・運用の手引き」公表
会員数101社に拡大

- 1994年 4月 出版VAN連絡会の業務を取協・書協VAN推進会議に移管

- 1995年 2月 「業界オンライン標準データ・フォーマット集」公表
- 1998年 9月 「業界オンライン標準データ・フォーマット集 改訂第2版」公表
利用出版社237社、取次5社

- 2003年 4月 取次代表委員・出版社代表委員により出版VANを新サービスへ
⇒**新出版ネットワークに移行**

新出版ネットワーク検討委員会の歩み

第1回 2021.11.15

- * 富士通Japan(株)より、2023年12月のIP化を見据え、2023年3月末までの移行を目標としての回線移行のスケジュールと対応方針の説明を受ける。
- * JPRO利用の出版社2,000社に「利用実態調査のアンケート」を出すことを決定

第2回 2021.12.15

- * 利用社アンケート集計結果報告
- 送信社数…2,289社（JPRO登録全社）、回答社数…173社（回答率7.6%）
- 出版VAN利用社95社（取次経由…48社、倉庫会社経由…47社）
- 非常に役立っている+やや役立っている…85社（89.5%）
- 富士通との折衝を委任する…85社（89.5%）
- * 富士通Japan(株)に、業界向け説明会の開催を要請することを決定
- * 広く業界の意見を吸い上げる利用社有志の会（ユーザー会）の設立で合意

第3回 2022年3月2日

- * 富士通Japan(株)主催による説明会開催を了承。3/14、15、16にオンライン（Teams）開催
- * 説明会には委員長、副委員長が出席し、最後に参加出版社に対し「ユーザー会設立」の案内をすることを決定
- * 今後の出版VANの在り方を見据えて議論するため、取次会社の仕入担当者にも委員会加入を要請することを決定

第4回 2022年5月26日

- * 当委員会は「ユーザー会世話人会」として活動していくことで合意
- * 販売会社での出版VAN利用について、取次会社委員から説明、出版VANは、受発注を中心に物流部門での利用がほとんどで、商品情報としてVANはほぼ使っていないが、在庫ステータスと価格情報は業務に活用する重要情報であることが紹介された。

第5回 2022年7月14日

- * ユーザー会参加状況（62社）の報告
- * ユーザー会へ12種類の標準データフォーマットについての利用実態を聞くアンケート実施を決定

第6回 2022年10月26日

- * ユーザー会アンケートの実施報告、参加80名に対し出版VAN利用実態を調査、想像していた以上に社によって利用実態にバラつきがあることを確認。書誌情報の送信等について議論
- * 出版社向けに、出版VAN利活用のメリットについて説明会開催を決定、取次会社にも説明役を要請。
- * 現行のマニュアルが1998年発行で改訂されておらず、内容が仕様書形式となっているため、ユーザー向けにもっと分かりやすい説明書が必要との意見が出された

第7回 2023年3月3日

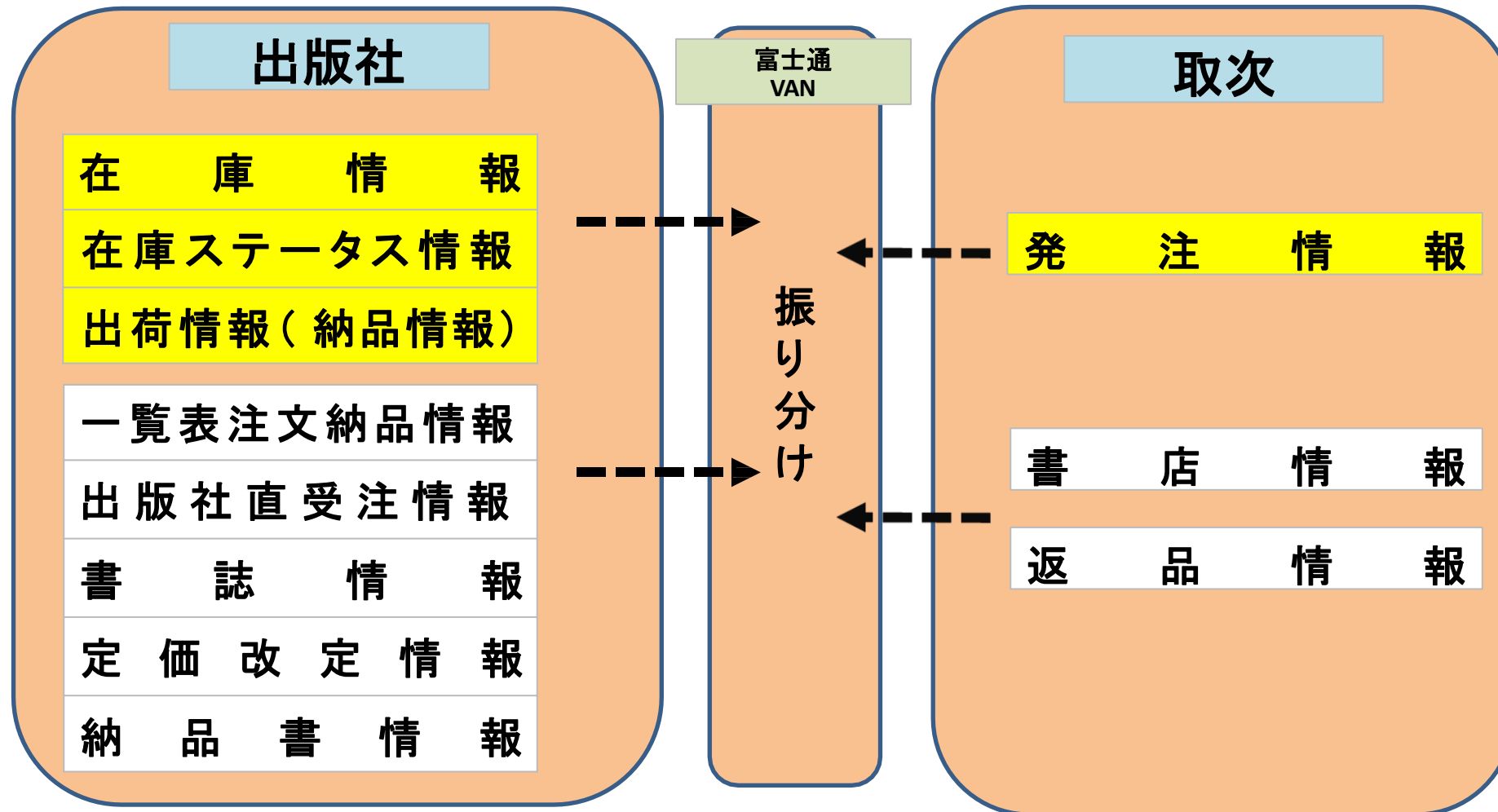
- * 取次協会情報システム研究委員会より、回線切替について2月末時点で648社（全体の83%）が終了、残りも2023年6月頃までに完了予定であることが説明された。
- * 4月26日に「新出版ネットワーク勉強会」を開催し、出版社、取次会社の活用事例を説明することを決定

第8回 2023年10月12日

- * 4月の勉強会の結果を受け、特に在庫情報のやり取りに関わる出版VAN利用実態について2回目のユーザー会アンケート実施を決定

第9回 2023年11月17日（水）

- * 第二回ユーザー会アンケート結果を分析、回答に寄せられた出版VAN活用に関する疑問に答える報告書を作成することを決定



取次会社の利活用について「在庫情報と受発注・出荷情報」

①-1在庫ステータス(在庫ST)とは

- ・在庫ステータス(在庫ST)とは、

銘柄個々の在庫状況を表現したコード番号

です。

- ・出版社から取次会社に提供することにより、

取次会社 出版社間の受発注

書店 取次会社間の受発注

がスムーズに行えます。

①-2在庫ステータス(在庫ST)とは

在庫STコード一覧

在庫 ステータス コード	内 容		
	項目	意味付け	取次→出版社 発注可否 (標準)
11	在庫あり	出庫可能。	○
12	出荷部数調整中	出庫可能だが、部数は調整する可能性あり。	○
21	在庫僅少	在庫少なく、出庫調整中。出庫できない場合あり。	○
22	重版中	重版出来次第出庫。出来予定日も表示。部数は調整する可能性あり。	△
23	未刊・予約受付中	刊行前だが予約注文を受け付ける。	○
24	品切・注文受付中	在庫なし、重版検討・返品改装待ち。注文は受け付けるが、部数は調整する可能性あり。	○
29	その他		
31	未刊	刊行前につき注文は受け付けない。	×
32	品切	在庫なし。重版中でもない。原則として注文は受け付けない。	×
33	品切重版未定	絶版と同義語。絶版表現を希望しない出版社が使用。	×
34	絶版		×
35	専売品	取次ルート取り扱いなし。特定団体・個人向け専用。	×
36	通販品	取次ルート取り扱いなし。通販専用。	×
39	その他		

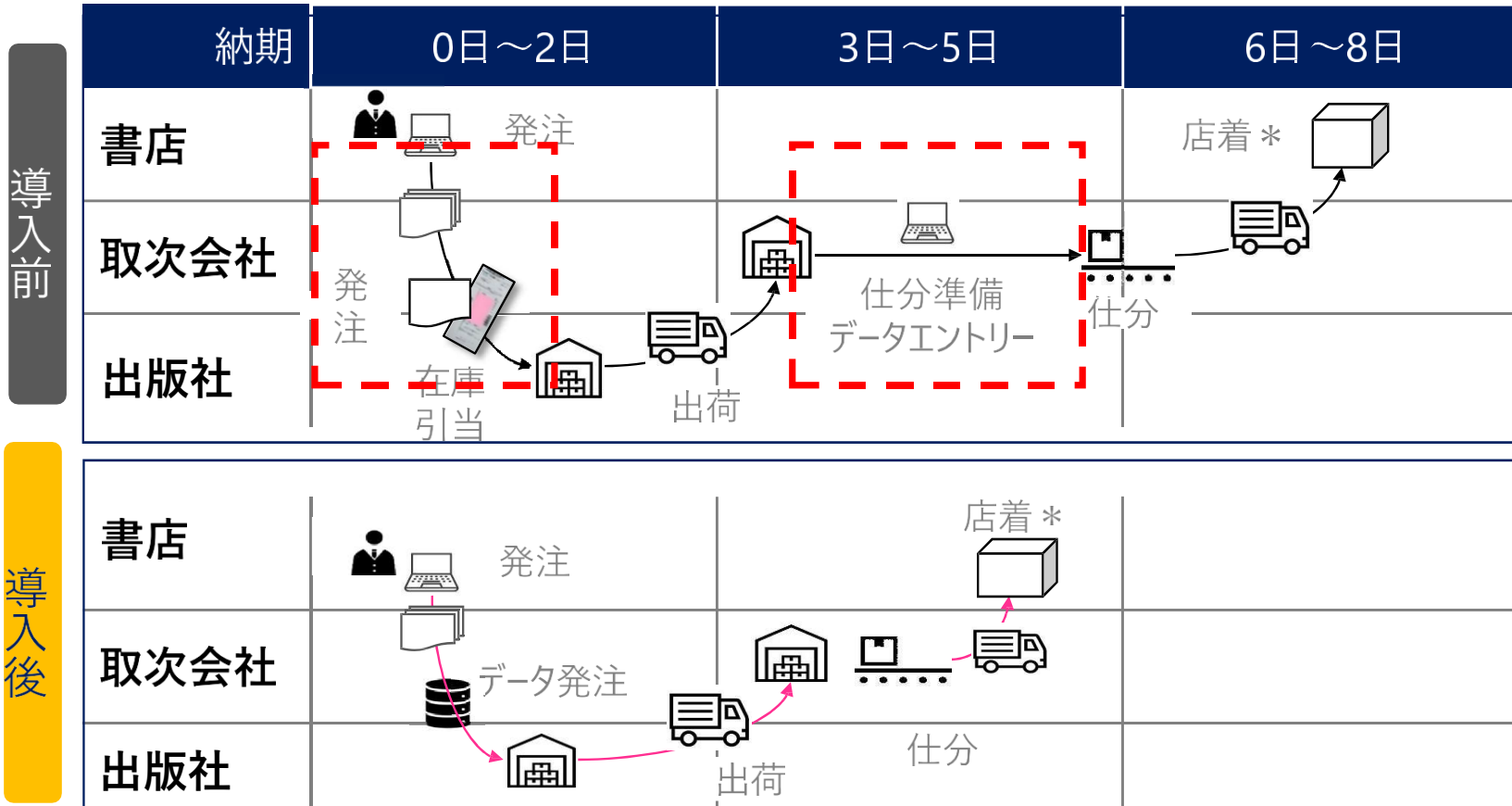
②出版VAN導入のメリット

3つのメリット

- ・「納期短縮」を実現できます
- ・「販売機会」が拡大します
- ・「物流精度」が向上します

②-1 出版VAN導入のメリット(納期短縮)

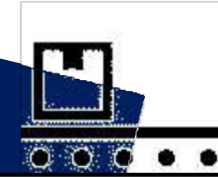
納期を3営業日短縮(モデルケース)



「連携されたデータ」で書店への「即時仕分」が可能となり納期短縮が図れます

②-2出版VAN導入のメリット(納期短縮)

「短冊」や「注文書」の処理工程



④データ生成後に
仕分けの工程へ



③注文情報のデータ化

②書店別仕分

①搬入された商品
(仕分作業待ちの状態)

書店への仕分の前に、「データ化」を行う工程が発生しています



②-3出版VAN導入のメリット(販売拡大)

販売機会の拡大

導入前

出版社の倉庫の在庫情報が伝わらない

日販帳合書店店頭POS(NOCS7)画面イメージ

出版社在庫

在庫情報の公開がない版元のため不明です。

お取り寄せ銘柄のため、調達にお時間を頂きます。お取り寄せできない場合もあります。

銘柄情報

Sample

書籍

書名

シリーズ名

副書名

多巻物書名

原書名

Sample

「販売機会ロス」！？

②-4出版VAN導入のメリット(販売拡大)

販売機会の拡大

導入後

「出版VAN連携」で、在庫情報が一目瞭然

日販帳合書店店頭POS (NOCS7) 画面イメージ

出版社在庫

在庫あります。

銘柄情報

Sample

書籍

書名

シリーズ名

副書名

多巻物書名

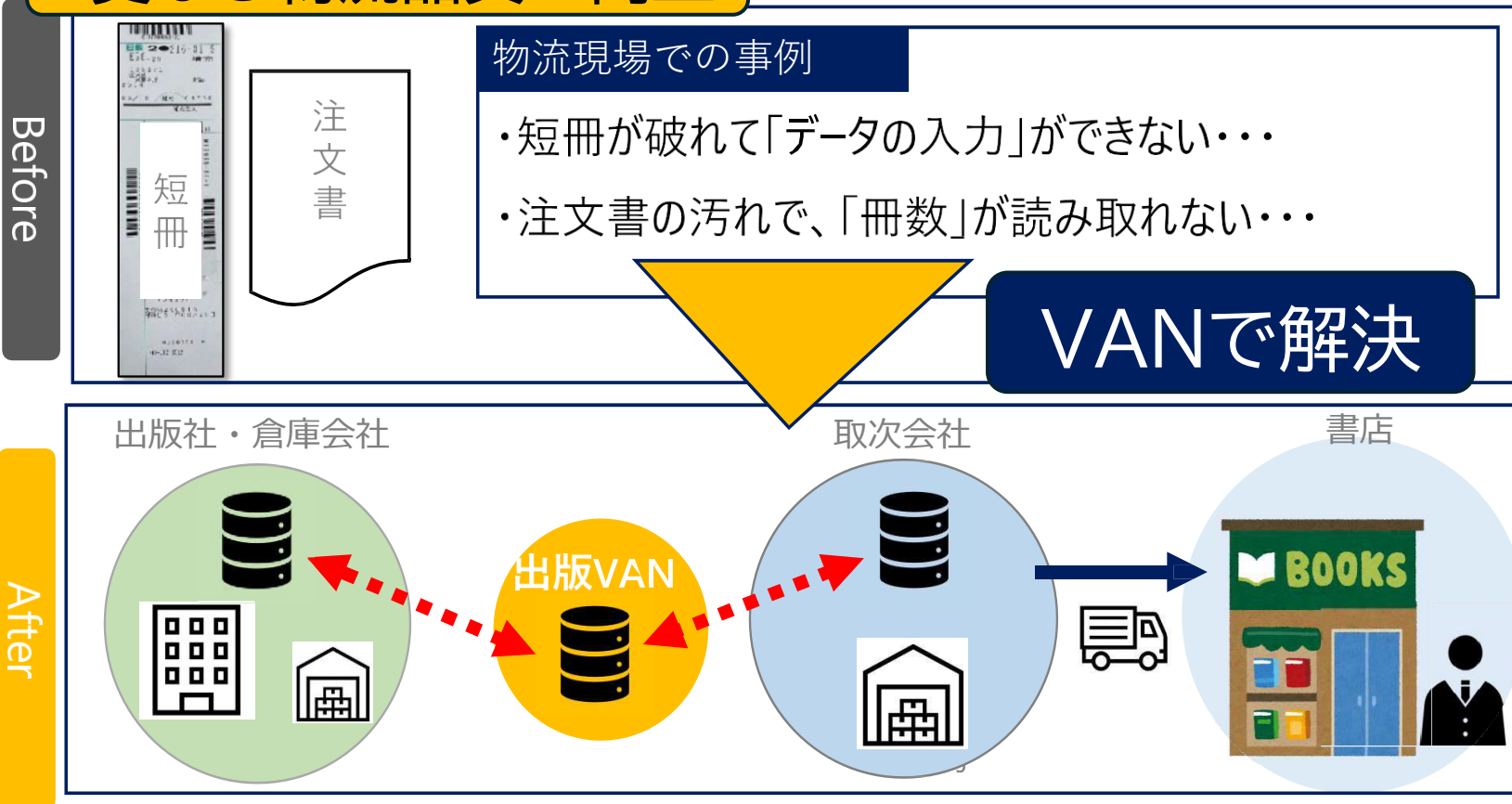
原書名

Sample

販売機会のUP

②-5 出版VAN導入のメリット(物流精度の向上)

更なる物流品質の向上



「受発注データのEDI」による情報制度の向上が、物流品質にも影響します

③-1出版VANを開始するには

開始へのステップ

- ① 「富士通Japan(株)」との契約
- ② 「取次会社 出版VAN窓口」への連絡
- ③ 「取次会社」とテスト運用の実施

原則、①は有償、②③は無償となります

③-2出版VANを開始するには

開始までの手順

	手順	ご説明	行動主体
1	VANセンター（回線会社）との利用契約	VANセンター利用にあたっては回線会社との契約が必要です。契約を行うためには回線会社(富士通Japan(株)様)へご連絡ください。 富士通Japan 新出版ネットワーク担当 【Email】 fjj-shuppan-info-external@ml.jp.Fujitsu.com ※メール本文に必ず連絡先情報をご記入ください。	出版社
2	取次会社との打ち合わせ	どのような情報をどのような仕様でやり取りするのかについては各取次との打ち合わせが必要です。取次によって一部仕様が異なることもあります。全体的なスケジュールについてもここで打ち合わせます。	出版社・取次
3	在庫ステータス一括送信	出版社の商品について、現在どのような状態にあるのかを確認するために全点の情報をお送りいただきます。	出版社
4	商品マスタ照合作業	お送りいただいた全点のデータと取次商品マスタとの照合作業です。双方で認識している商品リストに相違がないか確認します。	取次
5	オンライン受発注テスト	取次にてテストデータを作成し、出版社に受信いただきます。出版社は受信後、引当～出荷回答までテスト願います。取次では受け取った出荷回答～出荷指示データ作成まで一連の流れに支障がないかテストします。	取次・出版社
6	スケジュール確定・準備	テストに問題がなければ受発注開始スケジュールを確定し、(必要であれば) 納品に必要な資材のお渡しを行います。	取次・出版社
7	オンライン受発注本番開始	スケジュールに従って実際の受発注開始となります。開始後も連休に伴うスケジュール調整・トラブル対応等連絡を取り合う機会は多く発生します。運用担当者を確認させていただきます。	取次・出版社

まとめ

Point
1 「出版VAN」の利用によって様々なメリットがある

Point
2 利用開始には「富士通Japan(株)」との契約が必要

Point
3 「取次会社出版VAN窓口」とも運用確認をお願いします。

第2回 新出版ネットワークユーザー会向け アンケート結果 (2023年12月22日)

ヒアリング実施日	1回目：10月27日		
	2回目：11月9日		
ヒアリング対象者	ユーザー会参加者：82名	回答社：19件	回答率：29%

■ 主な質問と回答

Q1	2023年4月26日開催した「新出版ネットワーク勉強会」では、VAN導入のメリットとして「納期短縮」の実現、「販売機会」の拡大、「物流精度」の向上が挙げられましたが、御社では、これらメリットを実感されていますか？	A： はい 15件 (79%)、いいえ 4件 (21%)
Q2	Q1で「いいえ」と回答した方へどのような課題があるか具体的にご記入ください。	A： ・勉強会の内容はVANで有する機能を最大限活用できていないと思う ・勉強会の説明は以前とそれほど変わっていない印象を受けた ・長くVANを利用しており勉強会の意図や変化が理解できなかった ・課題整理はできていないがメリットは実感していない
Q3	VANの在庫ステータスに関連しての質問です。貴社社内では、在庫ステータスのメンテナンス（更新）をどのくらいの頻度で行っていますか？	A： 毎日 10件(53%) 必要に応じ随時 5件(26%) システムのロジックに任せている 3件(16%) 週1回程度 1件(5%)
Q4	Q3の結果をVANの在庫ステータスとして取次会社へ送信する頻度をご選択ください。	A： 毎日 14件(74%) 必要に応じ随時 4件(21%) 週に1回程度 1件(5%)
Q5	Q4で「送信していない」と回答した方へ在庫ステータスを取次会社へ送信しない理由をお聞かせください。	A： 0件 (Q4: 送信していない 回答者 0件)

		ご質問	回答
Q 6	在庫ステータスの決定や送信に関するご質問などありましたらお聞かせください。	1	<p>・送信した在庫ステータスが取次・書店発注に反映される日数が知りたい</p> <p>出版社や情報の種類により異なりますが、基本、販売会社は1日1回の日時更新を夜間に行い、翌日の朝、反映されます。(土日祝日は除く)</p>
		2	<p>・在庫ステータスを現在どのように使用しているか販売会社からの在庫ステータス提供先はどこなのか知りたい</p> <p>販売会社から出版社への発注判断や独自システム内での該当商品の調達可能性判断に使用しています。在庫ステータスは販売会社内のシステム、社外向けシステム(TONETS、e-hon、NOCS等)で利用するだけでなく、取引書店(ネット書店を含む)にも要望に応じて、販売会社から更新データを配信しています。</p>
		3	<p>・販売会社様と出版社が運用の摺り合わせを行うことができれば、全体として効率化される可能性があるのではないのでしょうか</p> <p>可能性はあります。 例えば、在庫ステータスの開示のみの出版社は、販売会社との受発注までを含めた利用により、販売会社は搬入商品のソーター処理(機械による書店別仕分け)が可能になり、書店着を早めることができます。</p>
		4	<p>・基本は日次更新だが、緊急性の高い(急に品切れとなり品切れを告知したい場合など)に受ける側での逐次更新仕様は可能でしょうか</p> <p>VANでは緊急性の判断は出来ず、夜間バッチで最新情報が取り込まれます。</p>
		5	<p>・在庫ステータス32(品切れ)でも注文データが飛んできますが、こういうルールなのでしょう吗?</p> <p>販売会社と出版社とで予め決めた設定で運用しています。設定の変更をご希望の場合は、販売会社へご連絡願います。(販売会社側でどのくらい受注が保留されているかを把握されたい出版社は、出版社在庫が品切れ状態のステータスであっても、発注データを送信しています。)</p>

		ご質問	回答
Q6	Q6の続き	6	<p>各社の一例をご参考になさってください。</p> <p><A社の場合> 一定期間の受注数とそれに対する在庫数を基に品切基準数を計算し、現在庫が基準数を上回ればステータス11(在庫あり)を付与します。ステータス12(在庫部数調整中)、ステータス21(在庫僅少)は新刊・準新刊などで在庫調整を必要とするケースで任意に立てることが多いです。</p> <p><B社の場合> 商品ジャンル、刊行時期(近刊かそうでないか)ごとに最低在庫必要数を設定し、下記で運用しています。 [現在庫>設定数] → ステータス11 [現在庫<設定数] → ステータス21</p> <p><C社の場合> ステータス21 に更に社内ローカルルールによるハウスコードを3種類付与して運用することで細かい対応をしています。 ★在庫ステータス11にしたものは基本的にはすべてVANでの受注在庫を可能とし、受注したのに在庫できないといった事故を無くすようお願いいたします。</p>
		7	<p>・ステータス送信を1日に2度してしまうと、取次会社の取り込んだステータスデータとに差異が生まれてしまうようです。</p> <p>例) 商品Aをステータス11で朝送信。取次はステータス11を取り込み午後在庫数変動によりステータスが33に変更、データ送信。 取次では取り込み1日1度のルールがあるため取り込まず(11のまま)翌日、版元側はステータス33送信済みのためデータ変更なく、ステータスデータは送らない。版元側はステータス33, 取次側では11の齟齬がそのまま残る。</p> <p>この状況をチェックする方法があれば教えて下さい。 解決策としては、一旦別のステータスに手動変更し送信。 翌日正しいステータスデータに変更して再送信、という手段です。ただ、版元側と取次側で齟齬が出ているかどうか、察知する方法が現状ありません。</p>
		8	<p>・弊社では近年紙代の値上がりなどによる本体価格変更などが相次いでおり、おそらく他版元も同じ状況だとは思いますが、例えばVANでお送りしている定価変更情報はいまどのように使用されているのか、というような現状を知りたいのと、また、例えばネット書店の定価表示をスマートに変更するためにはVAN送信などを含めた手順をどうすればよいか(他社で良いアイデアなどがあるか)、というような、版元間の情報交換ができる機会があると良いと思います。</p> <p>出版社により異なりますが、基本、販売会社は1日1回の日次更新を夜間に行っています。(土日祝日は除く) 仮に2回送信した場合は後(2回目)の情報を取得します。TONETS i をご利用の出版社は、銘柄一覧画面から自社銘柄を全件ダウンロードいただくと、項目中の在庫ステータスで確認が可能です。(単品実績画面上でも可能です。)</p> <p>出版社がVAN送信した定価改定の情報は、VANフォーマット上の「価格改定日」にあわせて商品マスタを更新し、提供社にはその翌日に送信されます。 ネット書店にも情報発信されますが、その後の対応は書店側のオペレーション次第となります。</p>

ご意見・ご要望		
<p>今後、VANの利活用を活発にするため、当面、新出版ネットワークユーザー会としてどんな活動を希望されていますか？</p> <p>7 具体的にご記入ください。 (例：JPRO書誌情報との連携、書店新規店情報の早期配信など)</p>	1	・ JPRO書誌情報との連携
	2	・ 鎌谷書店に加入していただきたいです
	3	・ VANを利活用するというのではなくWebEDI等に置き換えて、納品のレスポンスタイムの短縮やRFID情報の活用を業界として考えた方がいいのでは？
	4	・ JPRO書誌情報との連携、出版業界情報の共有など
	5	・ 受注生産（POD）注文への対応方法検討，書店新規店情報の早期配信検討
	6	・ 次のインフラを検討してください。
	7	・ VANの活用例（改善例）などの情報共有
	8	・ 他社の運用状況を学ばせていただく勉強会的があるとありがたい。
	9	・ 前回の会合では各社の実例とステータス活用の方法を行ったが、中規模出版社などの実例も含めたくさんの出版社の実例を確認したい。
	10	・ 6.と重なりますが、業界全体として効果的な運用を目指せると良い。
	11	・ 業界内での運用をできるだけ統一してほしい
	12	・ 現場ノウハウの勉強会や、細かな運用Q&Aなど。
	13	・ JPRO書誌情報、もしくはBookEntry・enCONTACTとの連携により、刊行前書籍を早期にVAN登録できるようにしてほしい。
	14	・ VANを利用していない会社がまだあるとしたら、そうしたところの参加促進を。書誌情報や新規書店の情報などとの連携？それは別問題な気がします。 書店の多くが在庫管理や販売状況でPOS等で電子化しているなか、書店さんのファーストルック／自動発注は販社さんの在庫情報ではないのでしょうか。 どちらが主導とかでなく共存共栄を。 たとえば コミックの在庫補充でS-BOOK利用が活発なのは喜ばしい反面、販社さんの効率流通努力を削いでいないか杞憂もしています。
	15	・ オンデマンドをのよう注文が来たら即時製造出荷に対応する在庫ステータスについて検討をお願いしたいです。
	16	・ フォーマット集の最新版を作成してはいかがでしょうか。 いまJPOからDLできるフォーマット集は1998年のもので、PDFとはいえ画像コピーです。マニュアル的な部分も含めて再編集したほうがよいかと思ひます。